

Shin ひでみ てじてじ トム

しん

2012年8月25日土曜日 Vamos Papear 訪問（群馬県太田市ブラジル人の子どもの母語保持教室）訪問者：Shin、てじてじ、トム、ひでみ

振り返り

松尾 慎（Shin）

今回の訪問は初めて Vamos Papear を訪問した 2009 年 10 月以来、2 回目の電車による訪問となった。久喜駅から太田駅までの間に栃木県の足利市などを通過するということをおぼれていた。

今回から、日本語学習支援を始めることになった。今回の「学習者」は Vamos Papear の学習支援者の Silvia さんと保護者の Marly さんだ。今回はてじてじに担当してもらった。というのは Shin は、ポルトガル語を学んでいる中学生の Kazuo 君と一緒にポルトガル語の勉強をしようと Kazuo 君が使用しているポルトガル語のテキストを購入して持参したからである。しかし、Kazuo 君がお休みだったので、てじてじとともに日本語学習支援に回った。場所は 2 階の一番奥の部屋を利用した。3 階の子どもたちが学んでいる

大教室でもいいかと思ったが、Marly さんが集中したいということで 2 階を利用した。活動の前に、Hiromi に通訳してもらい、いわゆる勉強型の活動はしないことを伝えた。てじてじが持参した『みんなの日本語』を見せて、「こうした教科書を利用した場合、初級が終わるのに月に 1 度の活動を想定したら、7 年掛かってしまう。皆さんはすでに生活の中で、色々と日本語を聞いたり使ったりしているので、教科書で 7 年も掛けて学ぶのはやめましょう」と伝えた。今回準備したのは『にほんご これだけ！ 1』でトピック 1 から 3 までをコピーして持参した（てじてじと Shin は本を持参した）。結局は、トピック 1 のしか

てじてじ	Marly
Shin	Silvia

も途中までで終わった。いい意味で脱線したからである。座り方は左の図の通りである。

基本的にはてじてじがリードした活動となった。てじてじも日本語教師として 10 年ちょっとの経験を持っているし、特にプライベートレッスンの経験が豊富なので、多様な学習者、学習スタイル、学習ニーズに対応する実力を持っている。Shin はサブ的に関わろうとした。

Marly と Silvia は好対照なスタイルであった。まず、面白いのは Marly はひらがなよりカタカナの方が分かりやすいと言い、Silvia はひらがなの方が分かりやすく、ひらがなは促音まで含めて書いていた。Marly は読めるけど書くのはまだしんどいといった感じだった。Silvia はコピーのアルファベットの部分をすべて消していた。例えば、「そば soba」と書いてあると「そば ~~soba~~」としていた。アルファベットにひっぱられると発音が正しく理解できないという Silvia なりの考えがあるのだろう。何かにつけて Silvia は理論派で、さ

すが化学工学で博士号を取得しているだけのことはあるなと思う。

おしゃべりも二人は好対照だった。Marly はてじてじが「朝ご飯は何を食べましたか」と質問すると、すぐに「パンと●●を食べました。コーヒーを飲みました」と答えるし、日本語での発話量がかなり多い。一方、Silvia は頭の中に本当にあることをとにかく伝えたいという気持ちが強いので、日本語での会話だけでつないでいくことが難しい。例えば、昼ご飯に食べたものを答えてくれたのだが、何か言いたそうなので、尋ねてみると「anemia」と言う。anemia はポルトガル語で貧血のことだ。つまり、貧血気味なので、医者から、食事に関しアドバイスを受けているので、こういう食事をしたのだ、と伝えなかったのだ。こうしたやり取りのためにかなりポルトガル語を使用した。Shin のポルトガル語能力もかなり怪しいので、てじてじが持参した、『旅の指さし会話帳 23 ブラジル』を見ながらの会話となった。また、Silvia は、「~は日本語でどう言いますか」というフレーズをどう言えばいいのか、とポルトガル語(Como se fala( )em japonês?)で質問してきた。学んでいくための必要な「道具」を自分自身でデザインしていくことができるのである。

さらに興味深い事例があったので記す。「くだもので なにが すきですか」という会話をした後、流れでサッカーの話になった。そこで、「サッカーのチームで なにが すきですか」を答えてもらった。その後、てじてじが、二人が答えたチームでそれぞれ「だれが すきですか」と水を向けると Marly はすぐに答えたのだが、Silvia がまた反応した。ポルトガル語で色々説明するのだが、よく分からない。見かねて Marly が説明してくれようとしたが、それでも分からない。結局、最終的に分かったのは「自分はサッカーが好きなんだって、あるいは好きなチームはあるんだけど、個々の選手が好きとかは思わない。だって、日本代表だって少し前はナカタって言ってたし、今はホンダでしょ。選手は移り変わっていくものじゃない。だけど、自分はサッカーが好きなので、個々の選手を特別に注目することはない」ということが言いたかったようだ。このように Silvia は言いたいことをいいたい、言いたいことしか言いたくないのだ。Silvia は太田のブラジル人学校に教務主任として勤務している。日本での暮らしも7年（あるいはそれ以上）になる。ブラジル人社会では自分自身の言いたいことをポルトガル語で表現しているのだろうが、いわゆる日本人社会に向けて、自分自身の考えやこだわりを伝える機会はほぼ皆無なのではないだろうか。実際、Shin 自身、Silvia と知り合って2年近くになるが、ここまで Silvia の考えを聞く機会を持つことはこれまでなかった。この活動は単に日本語学習支援の活動としてのみ捉えられるのではなく、自分が自分であるための大きな意味での「ことば」を獲得していくための活動なのではないかと思える。また、「支援者」である Shin やてじてじにとっても、ブラジル人参加者との相互理解を深める場であった。つまり、日本語学習支援活動は今後、Vamos Papear に参加しているブラジル人市民と日本人市民がより深い関係性を構築していくための一助として機能する可能性を秘めているといえるだろう。

Silvia のことを中心に書いたが、Marly もこれだけ日本語で話したいという意欲があるのだということが伝わった。また、いつも明るい Silvia の本当の人となりが見え、日本語活動をす

ることでより伝わった。最初は1時間程度と話していたのだが、結局、2時間近く活動した。活動を終わるときに、Marly が次も楽しみなので、次回はいつやるのか、土曜日は仕事が入ることも多いので早めに教えてほしい、と言っていた。

活動の途中で、Silvia と Marly の娘さんが活動の様子を見に来た。お母さんがどんな感じで「勉強」しているのか気になったのだろう。

次回の訪問は9月29日土曜日に決まった。その際には、てじてじ、Shin 以外の学生にも関わってもらいたいと思う。また、2時間は少し長いと感じたので、90分程度にした方がいいかなと思った。

今回は、ひでみさんが約1年ぶりの訪問となった。ひでみさんは不安がっていたが、子どもたちはひでみさんを見てすぐに「ひさしぶり！」と声を掛けていた。そのあたりは、また、ひでみさんが振り返りを書いてくれるだろう。

ひでみ

振り返り 2012年8月25日の Vamos Papear ひでみ

久しぶりの参加でした。電車に乗っている時、いや、行くと決断をした時から、緊張していた気がします。今回は印象的だったことが大きく3つあります。

1つは、教室に向かい、子どもたちの姿が見えるとすぐに、Ayumi ちゃんが「あー！久しぶり！」と声を掛けてくれたことです。私は『久しぶりの参加だけれど、“お客さん”ではなくていいんだ』と一瞬で安堵感を得ました。緊張感がほどけ、Vamos Papear を通してあじわってきた、色々な出来事や感覚が、一度に思い出されました。フェスタジュニーナ、スピーチの練習、Ayumi ちゃんのお家にホームステイさせてもらった時のこと、Vamos Papear という“場所”、皆さんの温かさなど、ひとつひとつを頭の中に浮かべていました。Ayumi ちゃんの立場、ましてや中学生の頃だとしたら、恥ずかしさや、戸惑いで、自分から声を掛けることはできなかったと思います。久しぶりに参加するのにも関わらず、“入っていく”ことができたのは、Ayumi ちゃんの開口一番の、その言葉があったからでした。

2つめに、子どもたち（特に男の子たち同士）の繋がり方を私自身がよく感じられたことです。勉強する時間には、今回は男の子たち（Mateus くん、Leandro くん、Rafael くん）の輪に入れてもらいました。子どもたちの輪の中で私が日本語で話していると、Mateus くんがさりげなく『Leandro くんはポルトガル語と日本語を両方使いながら話すかも…』ということを知らせてくれました。知らせてもらえたおかげで、音読をする Leandro くん

んの横に座って聞いていた時には、読み終わった後「これは、楽しい話？ 悲しい話？」などと、身振りを混ぜてやり取りをすることを心がけることができました。また、Leandro さんのほうからも、Hiromi さんと呼んでほしいということや、のどが渴いてのどが痛いということも身振りを混ぜて私に伝えようとしてくれました。Mateus くんは、Leandro くんが色鉛筆を使うことを察すると、自分のカバンから色鉛筆を持ってきてくれました。Leandro くんは『色鉛筆を貸して (←推測ですが…)』という言葉が、Hiromi さんがいる前では照れくさいからか、言えなかったけれど、子どもたち同士になった瞬間に伝えている姿を見ました。また、『のどが渴いてのどが痛い』けれど、『持ってきた飲み物が終わってしまった』という時には、Rafael くん理由を話して、もらっていました。Rafael くんも、Leandro くん普段ふざけ合ったりしている時の雰囲気とはまた別で、理由を聞くすぐに分けてあげていました。Rafael くんは、私が Leandro くん音読している横にいる時に、「ここ読むから聞いて」と近くに寄ってきてくれました。それはポルトガル語が話せない私でも、少しでも役立つと感じさせてくれた、私にとって嬉しい出来事でした。私は今まで Vamos Papear に行った時、無意識ですが、女の子たちと接している時が多かったので、男の子たちに対しては、ダンスの練習の時などの「元気な」イメージが強くありました。しかし、今回一緒に勉強する時間を過ごした中では、男の子たちがお互いを思いやる気持ちが表れている場面を間近で見て、子どもたち同士の強い繋がりを感じました。

3つめに、子供たちがひとまわりもふたまわりも「大きく」なっていたことです。久しぶりの参加だったので、子どもたちの身長や顔つきに変化を感じたのはもちろんですが、それに加えて、特に、Ayumi ちゃんやミレナちゃんを中心となって、ちいさな子たちをまとめる姿が印象的でした。例えば、子どもたちがそれぞれの問題集に取り組む時間では、作文に取り掛かれない子に対して「中学生や、高校生になれば、作文たくさん書く時があるんだよ、しっかりやったほうがいいよ」と言い、問題を一緒に読んで、ポルトガル語で問題の意味を説明していました。また、ビンゴで遊ぶ時には、ミレナちゃんは数字を取り出す箱と一緒に考えてくれたり、進行をしてくれました。Ayumi ちゃんも景品をもらう子たちを誘導したり、その場を盛り上げる雰囲気を作っていてくれました。できることを自分たちで気づき、Hiromi さんや Erika さんに頼るのではなく、確認をして自ら行動している様子を何度も見ました。

Vamos Papear にいる子どもたちは、普段の学校や部活動などでも、自分よりも学年が上の人から色々な影響を受け、学んでいることがあると思います。しかし、子どもたちにとって Vamos Papear で、Ayumi ちゃんやミレナちゃんのような年上の人々の行動や言葉を受けて、刺激を受けたり憧れたりして、成長していくことはとても大切な意味があると考えます。私も小・中・高・大学生の時と、親でも先生でもなく、先輩の姿を見て「こうなりたい」と大きな挑戦をし、成長を実感できた時があったからです。子どもたちにとって

Vamos Papear が、自発的に動いたり、そうする年上の人の姿が見れることで、「自分らしい基盤」を築くひとつの場であること、また子どもたちの成長によって Vamos Papear が変化していていることを感じました。

てじてじ

2012年8月25日(土) ふりかえり

てじまりえ

久しぶりに電車で太田に行きました。天気もよく車窓からの田園風景がとてもきれいでした。今回の東京からのメンバーは、まつお先生、トム、ひでみちゃん、私の4名でした。トムからは、修士2年目の夏に色々な想いを巡らせていること、学部4年生のひでみちゃんからは、進路が決まり、これから日本語教員養成課程の実習が始まること、また卒論についても絞らなければならないことを聞きました。トムもひでみちゃんも、近い将来、遠い将来への不安や期待が渦巻く中、「太田に行こう」と思っている点が妙に納得というか共感する部分です。一方で、なぜ太田なんだろうとも思います。活動場所、活動時間、東京からの距離、関わっている人々、人と人との関係、活動目的、活動内容、、、まだ挙げられるかもしれませんが、どれもが必要不可欠な要素なのではないかと思えます。そして、それらの相互作用も関わってくると思えます。なぜ太田(に行くの)かという問いは、私自身、問い続けるとともに、はずるのメンバーにも尋ね、それこそKJ法で整理してみたいです。

この日は、日本語支援が始まりました。実は、どのような経緯でこの企画が立ち上がったかはわかっていません。確かHiromiさんとまつお先生がメールのやりとりで決め、日程もはじめから決まっていたと思います。私は、日本語教師をしているので、この企画に関わるのは当然なのかもしれませんが、少し戸惑いや躊躇もありました。日本語教師として責任やプレッシャーを感じてしまったり、今私が担当している学習者に申し訳ないという気持ちがあったからです。

8月25日が近づき、具体的に計画を立てなければと思いましたが、結局、事前にできたことは、使用教材を決め、そのコピーを数枚用意することだけでした。あまりに未確定なことが多くて、とにかく始めてみなければわからないことだらけだったからです。SilviaさんとMarlyさんが参加予定でしたが、二人の四技能(聞く・話す・読む・書く)がどのくらい全くなりません。また、二人が日本語クラスに何を期待しているかもわかりません。そもそも、当日二人がキャンセルということもあり得るし、今後継続可能かどうか未知らの世界です。まずは、気楽にやってみようという、いい意味でいい加減な思考が必要だと思えました。とは言え、当日の行き電車でとても緊張していました。

クラスは、たっぷり二時間行いました。クラス参加者は、Silviaさん、Marlyさん、Shin、Lieの4名です。場所は、子どもたちと同じ3階でもよかったのですが、Marlyさんが集中したいということで2階奥の大きい部屋となりました。始める前に、共通認識を持つために、Hiromiさんに通訳をお願いして以下の内容を話しました。「日本語学校のようなところでは、文法積み上げ式で毎日4時間程度勉強している。しかし、このやり方で月に1回のペースだと初級が終わるのに約7年もかかってしまう。それは現実的ではない。日本での生活も長く、多くのことを見聞きしてきたSilviaさんとMarlyさんには、おしゃべりをする中で、その都度必要なことを学んでいく方法が適していると思われる」と説明し、いわゆる「教室」での授業スタイルをとらない旨を伝えました。

『にほんごこれだけ!』という教材の「1. おなかですきました」を使って、食べ物の話から始めました。Silviaさんは、言語に関わらず自分が本当に話したいことを話します。そして、そのために必要な文法の型を自ら探りポルトガル語で尋ねてきます。一方、Marlyさんは、自分のできる範囲でなるべく日本語を使って話そうとします。こちらが示した文型に沿って、その範囲内で自分に近づけた話をします。二人のコントラストがおもしろかったです。『旅の指差し会話帳 ブラジル』が非常に役に立ちました。カテゴリ一別に単語や短文が示されていて、絵や地図もあり、『にほんごこれだけ!』の内容を広げることができたからです。

二時間みっちり話しました。少し長いように感じました。Shin せんせいがいたこともあり、ポルトガル語がかなり飛び交った日本語クラスでした。今回は、ポルトガル語を理解するShinせんせいがいたので、Silviaさんは自分の言いたいことを述べるという理想に少し近づくことができたかもしれません。もしShinせんせいがいなかったら、Silviaさんは、どうなっていたかなあと考えます。今後もSilviaさんの独自の学習スタイルにドキドキしながら関わりたいです。Marlyさんは、今回の日本語支援企画を以前からとても楽しみにしていてくれました。初回の二時間を終えて、どう思ったかな、もしかしたら期待と違ったんじゃないかなあと少し気になりました。でも、次回の日程を決めて欲しいと言ってきてくれたので、逆に励まされた気持ちになりました。それから、おしゃべりをする中で、私が知らないブラジル料理の名前があがったとき「今度うちに来たら作ってあげる」と言ってくれたことが私にはとても嬉しく、印象に残っています。私が（勝手に？）感じているMarlyさんとの友情は、こうしてゆっくりと少しずつ深くなっていけばいいなあ、この日本語クラスもそのきっかけになればいいなあと全く個人的な感情でそう思いました。

日本語の上達が目的ならば、どう考えても月に1回のクラスでは少なすぎます。ならば、Vamos Papearの日本語クラスは、それぞれの生活の中の日本語学習活動の拠点になればいいなと思いました。日本人とことばを交わすきっかけになったり、単語のひとつでも覚えてみようかなという気持ちになったり、もっとブラジルのことを日本人に詳しく伝えたいと思ったり、通りすがりの日本語をキャッチしてこれってどういう意味だろうと考えてみたり、生活の中に日本語学習を通して広がるのがたくさんあると思います。それらの拠

点として機能していけばよいのではないかと思います。また、日本語クラスでは、参加者の4名が全員これまで Vamos Papear 内で担ってきた役割と違う形で時間を過ごします。場が変わって役割も変わるということはあるかもしれませんが、Vamos Papear という同じ場でこのように関係性に变化があるというのは、おもしろいし、いいことなのではないかと思います。

日本語支援に携わっていたので、子どもたちとの時間は少なかったです。振り返りで子どもたちの様子などを聞いていると、Milena と Ayumi が子どもたちの作文の面倒を見ていたという話が出ました。前回、私が Vamos Papear に来たときも、Milena は、ポルトガル語での読み聞かせをし、小さい子どもの前でスピーチのお手本をしました。成長した子がリーダー的存在に育っていることが目に見えてわかります。振り返りでその話が出ました。「中学生くらいの子どもには、少しずつ手伝ってもらうようにしている、自分たちが関われる間がいいが、この先も続けていくためには、リーダーの育成を視野に入れて、子どもたちの自信につながるような場を設定していこうと思う」と Hiromi さんがおっしゃっていました。それがとても印象に残っていることばです。

帰りの電車は、疲れていることや、乗り換えの待ち時間が長かったこともあり、とても東京までの道のりが遠く感じました。と同時に、でも心の距離はけっこう近いよね、と改めて感じニヤニヤしてしまいました。

トム

私が Vamos Papear に参加したのは、フェスタ・ジュニーナ以来でした。回数的には4回目、自分でもやっと Vamos Papear に来ることが“自然”な感じがしてきました。教室に入った時、Ayumi ちゃんが Hidemi さんに続いて私にも「久しぶり」と声をかけてくれました。正直声をかけてもらえるとは思っていなかったもので、とても嬉しく感じました。

この最初の時から感じていたのですが、今回私は教室での活動の中で、役に立てて嬉しい、子どもと仲良くなれて嬉しいと感じることが何度もあって、そのたびに、私は自分がこの場でなんの意味もない存在ではありたくないと思っているのだな、ということに気付きました。認められたい、ただいるだけの人ではここ(Vamos Papear)にいる必要がない、という風に思っていて、認められるためには何かしなければ、という気持ちで結構必死でやることを探していました。何でこう考えるのかは自分でもよくわかりません。私が日本人で、ポルトガル語ができないから、というのが一番大きい理由だと思いますが、それだけではないような気がします。ただ少なくとも、私は Vamos Papear にいる間は自分の「日本人性」を意識せずにはいられないのだと思います。

勉強の時間は、一番年齢が下の子ども達のグループに入りました。この日は3人の子ども達が来ていました。子どもというのは、大人に自分を見てもらいたいという気持ちがやっぱり強いので、3人いると先生の取り合いのような状態になってしまい、Ericaさんがとても大変そうでした。Jullyちゃん、Kanameくん、Ryotaくんの3人で、同じ課題をそれぞれ自習して1ページ終わるとEricaさんに見せていましたが、ポルトガル語の力の差ははっきりわかるな、と思いました。Jullyちゃんはポルトガル語での会話がかなりできるので1人でどんどん先に進み、Ericaさんともポルトガル語で話しますが、RyotaくんとKanameくんの兄弟は、ほとんどポルトガル語がわかっていません。Kaname君は強い方の言語である日本語の読み書きもまだできないので更に難しいと思うのですが、日本語で説明しないとポルトガル語の問題文が読めないので中々先に進めないでいました。Ryotaくんの方が早いので、Kanameくんが何をすればいいのかわからないでいると教えてあげたりしていました。私は専ら順番待ちでつまらなそうにしている二人の相手をしていました。“お勉強”としては、余り成果が上がっているようには見えず、単純にポルトガル語の力をつけるということだけ考えると、この場にいる意味余りないようにさえ見えます。でも、ポルトガル語を学ぶという行為自体、それから“ブラジル”につながっていることが、大きな意味を持つ、少なくともいずれ持つ時が来るのだと思いました。ビンゴの時間や休み時間は、年上の子どもたちが二人、特にKanameくんの面倒を見ている姿が見られました。特にAyumiちゃんはKanameくんがまだ数字が読めないのを、ビンゴの時読まれた数を毎回教えてあげていました。こういう、ブラジルにつながる人たちの関係性の中にも、彼等が成長していく中でとても大切なことなのだと思います。